

批評・紹介

Joseph W. Escherick

The Origins of the Boxer Uprising

神戸輝夫

本書『義和團の亂の起源』の著者W・エシエリック(J・W・Escherick)氏はオレゴン大學歴史學部の教授であり、『中國における改革と革命——湖南と湖北における一九一一年の革命——』(*Reform And Revolution in China—The 1911 Revolution in Hunan And Hubei—*, 1976, 中國語譯『改革與革命』中華書局 一九八二)の著者として知られている。

氏の義和團研究は一九七九年末に始まる。氏は本書の著述に先立ち約一年間中國に滞在し、山東大學と第一歴史檔案館において義和團に關する多くの未公開資料を閲覽する機會をもった。特に山東大學では、同大學が一九六〇年、一九六五、六六年の二度にわたって行った義和團についての聞き取り調査資料(一部公刊)のうち未公開記録を閲覽している。また氏自ら二度にわたり、山東大學のスタッフとともに義和團の勃發地域に入り、追加の聞き取り調査を行うとともにその環境や社會について觀察を深めている。この知見は本書の各所に生かされている。

義和團の起源についての研究は、V・パーセル(V・Purcell)の『義和團の蜂起—背景の研究—』(*The Boxer Uprising; A Back-*

ground Study, 1963) が長らく重きをなしてきた。その後臺灣や中國から多くの關連資料が公刊され、加えて氏は上述のように未公開の資料を閲覽した。氏は「現代こそ義和團の起源について新しい觀點を提出する時期を得た」(序文)と述べ、「義和團は白蓮教の流れを引く」とするパーセルやその説を引くW・チェーカー(W・J・Duiker: *Cultures in Collision: The Boxer Rebellion*, 『衝突の中の文化—義和團の亂—』一九七八)を嚴しく批判する。本書の構成は次のようである。

序文

- 第一章 山東、一切が始まった所
- 第二章 祕密結社、義和團と庶民文化
- 第三章 帝國主義—キリストのために—
- 第四章 大刀會
- 第五章 鉅野教案
- 第六章 冠縣 一八九八、義和團の登場
- 第七章 續發する嵐
- 第八章 神拳
- 第九章 避けられない衝突
- 第十章 燎原の火

結び 起源に關する偶像の克服

以上の他に、追加小論文「清朝中期の義和拳と白蓮教」を掲げ、表八葉、地圖八枚、挿繪十圖、略語一覽、注、固有名詞と専門語の漢字語彙、參考文獻一覽、索引を附す。

次に各章の内容について紹介していこう。

第一章。義和團の活動舞臺になった中國北部平原(直隸・山東)

の地理的、政治經濟的狀況、社會構成の分析。この地域は、G・スキナー氏 (G. W. Skinner) のいう「北部中國地域」の心臟部に位置する。著者はスキナー氏の地域市場理論を高く評價するが、この地域についてはそのモデルに合わない點が幾つかあるとする。例えばスキナー理論によれば、この地域の南西部は經濟圏としては北京、天津に結び付けられるとするが、著者は大運河の役割などからして揚子江下流域の鎮江などの影響下にあると分析し、従つて北部中國と揚子江下流域の境界は山東省南部にあるとする。またこの南西部地域は大運河沿岸の一部を除いて商業化が進んでおらず、スキナー理論で周邊部として扱われる山東半島地域よりもその程度が低いとする。

著者は山東省を六地域に分け、義和團との関連で南・北西部地域をより具體的に分析する。南西部には「不管地」が多く、従つて盜匪も多い。彼らは普段は農民で、農閑期に地主を略奪した。地主制は廣汎に行われ、地主と小作との間には人的結合が強く見られる。各村落はこの人的結合を核にした緊密な共同體を形成し、土地に對して十分に防御的であつた。北西部では地主制は弱く、土地の十パーセントが小作に出されているに過ぎない。商品作物として綿花栽培が行われているが、その利潤は過度の人口により消費され、結局は小土地所有者の經濟を長く保障するものとなつた。この地域のエリートは地主ではなく富農であるが、限定された商業化の下では彼らがより上級の官紳エリートに發展するのは難しかった。この地域には自然災害が多發し農民は遠く河北まで移動したが、普段の年でも雇農として小範圍を移動する若い農民が多かつた。

兩地域に共通するのは儒教精神に溢れた典型的な郷紳が少くないこ

とである。著者はこれを實證するために山東省内の郷紳の數を六地域に分けて分析する。すなわち明、清期 (一三六八—一九〇〇) における各地域の科擧合格者 (擧人) 數を五十年毎に示す。この結果、兩地域は十六世紀前半までは省内の擧人の五割以上を輩出したが、以後十九世紀末までに五分の一強にまで低下したことを明らかにする。

第二章。山東省は周代齊國の齊巫いらい近代に至るまで各宗派の活動の舞臺となつた。山東省の人間は好戰的だとの評價があり、兵士の供給地であるとともに叛亂者をも生み出す地域であつた。特に西部地域はこの傾向が顯著である。これを證明する一資料は各地域の文・武科擧合格者 (擧人) の割合 (一八五一—一九〇〇) である。北西部の武・文學人の割合は一・二二對一、南西部のそれは二・三八對一で山東省全體の平均〇・七五對一をいずれも上回つてゐる。

拳術家と秘密結社との關係は一定でなく、ある結社は拳術家と全然關係をもたない。兩者が接觸するのは結社の指導者 (師) が武術の教授を行うとき、あるいは拳術家が結社への豫備軍として参加して來るときである。南、北西部における社會環境の一特徴は秘密結社や武術集團が廣く存在していたことである。白蓮教の王倫、八卦教の亂の際に現れた金鐘罩は不死身の術を行つたが、その術は義和團の降神附體というやり方と異なつてゐる。祖師會 (河南)、神拳 (山東) などの武術集團はその出現時期、場所など義和團と直接の關係はないが、その儀式や行爲の中に義和團のものと基本的に同一の要素を見いだすことができる。北部中國の村落には土地神や關公を祀つた小寺院がある。村民は願いごとがあると折々に參詣する

が、特に寺院の縁日（迎神賽會）は村の活動にとって重要な日であった。境内や廣場で歌劇が上演された。義和團の起源にこれらの歌劇が重要な役割を果たしていることについて従来殆ど觸れられていない。義和團に降神附體する神々は歌劇の主人公（武人）である。十九世紀以後、白蓮教など秘密結社は嚴しい彈壓を受けた。その結果、例えば地方特有の文學や歌劇に登場する英雄を神々として取り入れるなど教義上にも著しい變化を生じた。ここに至り秘密結社の教義内容と庶民文化との一線はあいまいとなる。こうして義和團の活動舞臺は準備されたと言える。義和團の活動の中で官側から批判された呪文、お札、降神附體などは、山東省西部の庶民文化の一部として理解できるものである。義和團が短時日のうちに大量の農民を組織できたのはこれが爲である。

第三章。山東省への列強の進出は天津（一八六一）、烟台（一八六一）の開港以後である。しかし烟台は半島部の邊鄙な地にあつたので重要貿易港に發展しなかつた。省内への綿製品輸入はまず綿布、次いで綿糸で行われ九〇年代に劇的に増加した。この趨勢は綿花と綿製品の生産地であつた西部地域に大きな影響を與えたといわれる。ただこの影響の程度については研究者の間にも意見の相違がある。著者は一九八〇年の平原縣、山東・直隸交界での聞き取り調査から洋糸や洋布は土布の市場を奪うほどには入り込まなかつたとしている。

山東省内のキリスト教改宗者は十九世紀末まで四萬七千二百餘人で、布教の中心はフランス系イエズス會である。プロテスタントは半島部を中心に活動した。八〇年代の布教で顯著な動きを示したのはドイツの宣教師 S.V.D. ヲその先頭に立つたのが J. B. アン

ツァー (J. B. von Anzer) である。教會は政治的支配の遂行のために直ちに建設された。教會はしばしば地方の政治や裁判にまで口をはさみ、時には北京の公使をつうじて總理衙門などにまで働きかけ問題を有利に解決した。こうして教會は中國の中に「絶対權」を確立するのに成功した。改宗の動機は國家の政治的壓力、地主の經濟的搾取、自然災害などによる飢饉からの庇護を求めようとしたもので、純粹に信仰の面からするものは少ない。北西部では個人或は數人の家族を單位とする改宗が一般的であり、南西部では全村あげての集團的な改宗が見られる。帝國主義とキリスト教は堅く結びつきながら西洋列強によつて中國に押し附けられた。それは九〇年代の後半の五年間に集中的にあらわれる。

第四章。大刀會の名が最初に言及されたのは一七三五年安徽省北部に於いてである。しかしその性質については何ら手がかりがない。一八九〇年代大刀會は金鐘罩という公式名稱をもつて現れる。金鐘罩は十八世紀以來武術集團として活動し、十九世紀の間に拳術を中心とし更にはレンガや刀を受け付けない（排磚排刀）不死身の技を附け加えた。金鐘罩と白蓮教の關係を指摘するものもあるが、山東省内ではそのつながりは見られない。

大刀會の根據地は南西部にあり、その會員の多くは小作人であり、中農、富農、郷居小地主ら「地方エリート」がリーダーである。彼らは大衆的宗教の中でよく知られた「眞武神」という一人の神を信仰した。著者の調査によつても大刀會が降神附體の儀式をもつという資料はない。九〇年代の大刀會は武術集團であり、その技は護符や呪文によつて促進されるが義和團や秘密結社とは別物であつた。九五年春、山東・直隸交界地方では自然災害などにより盜匪

が深刻な問題となった。日清戦争後の治安の手薄もあり、官側は大刀會を用いてこれに當たり成功したが、大刀會では次第に官との協力から離れた。九六年春、大刀會は一指導者の生誕祝賀を契機として組織的結集をはかったが、その統制は緩やかでカトリック教會の勢力を押さえる程のものではなかった。大刀會が反キリスト教の活動に移っていくのは、地域における彼らの影響力や勢力圏を守るためである。九六年六月、龐三傑を指導者とする大刀會とキリスト教徒の間に衝突が起こり、事件は大刀會側の敗北に終わった。地方官は大刀會の二名の指導者と三十名の會員を處刑し、一方、當事者の龐三傑には奇妙な方法で身の安全を保証した。即ち龐は一族四千餘名とともにカトリックに改宗し、その居宅の一部を教會や學校として提供したのである。地方官のこのような處置は、大刀會の指導者が地方エリートであり、地方官や軍隊と密接な関係をもっているときには效力を發揮し得たが一八九九—一九〇〇年の義和團には通用しなくなる。

第五章。九七年十一月一日、鉅野で二人のドイツ人宣教師が殺害される事件、いわゆる鉅野教案が発生した。事件の原因を追求する力は弱く九人が逮捕され、三人が處刑されて幕が降ろされた。ドイツはこの事件を勢力擴大の絶好の機會としてとらえ、極東艦隊を派遣しかねてから觸手を延ばそうとしていた膠州灣を占領した。初期の教案に際して列強は砲艦外交を展開したが、その目的は犯人を裁判に付する事にあつた。しかし鉅野教案は帝國主義の論理を一步進めた點で重要である。即ち列強はキリスト教に反對する勢力を彈壓するための「基地」を要求するという名目で、新たに中國の主權を犯したのである。清朝はドイツの要求を全面的に承諾し、地方官の

罷免更迭にも應じた。山東巡撫李秉衡の罷免は山東西部の人々からすれば意外であつた。李のキリスト教彈壓、地方經費の節約、黃河治水などは官僚としての有能さを示すものとして評價されていたからである。事件の核心がはつきりしないのでドイツの要求を認めることに慎重であつた他の列強も、最終的にはドイツとともに勢力範圍の擴張に狂奔した。李の在任中には宣教師の活動は押さえられていたが、今そのバランスが崩れキリスト教徒の權利が保護される方針が明らかになされた。S.V.D. は問題が起きると大刀會を非難し、騒動を扇動して内陸部への進出を企圖し始めた。その結果地方官はキリスト教に極端に反對の態度を取り、キリスト教徒も教會の力を今まで以上に誇示し始めた。保護者たるドイツ宣教師は新たに獲得した「基地」から敵對者を懲らしめる行動に出ることを約束した。

第六章。冠縣は義和團の據點であり、冠縣事件は大刀會を義和團に變身させる契機となつたと見なされている。冠縣は地理的には孤立しており、政治的には權力の浸透が弱く、軍事的には防衛が手薄で武術集團や秘密結社の活動が展開された地域である。さらに冠縣は直隸省の中に「十八村」と呼ばれた「飛び地」(插花地)をもつていた。著者はこの飛び地の發生は南北朝時代までさかのぼり得るとしている。飛び地は秘密結社だけでなくカトリックの活動にも好都合で集團的に改宗者を出した。冠縣事件はこの飛び地の中の梨園屯で起こつた。事件の原因は玉皇廟の敷地を教會用地として認めるか否かにあつた。地方官は郷紳との合議のうえ別の土地を教會用地として提供したが宣教師はこれを拒否した。九二年フランス公使が乗り出し、帝國主義の力を背景に廟地を確保したので衝突はエスカレートした。郷紳らは濟南にまで控訴したが裁判は打ち切りとなつ

た。この段階から鬪争の指導権は郷紳から大刀會のメンバーで「十八魁」と稱された若い貧農の手に移る。彼らは桃花拳の指導者として有名であった趙三多の支援を得た。桃花拳の名は春季に活動したことに由来し、香を焚いたり民間信仰の神々に叩頭することはあったが護符、呪文、降神附體などは行わない。九七年春から大衝突が起りキリスト教徒は四散し、廟地は取り戻された。しかし、九七年秋から九八年にかけてキリスト教徒の反撃が始まり鬪争は激化する。桃花拳のメンバーのうちキリスト教に反対したもたちは自らを「正義で結ばれた拳術家」（義和團）と稱した。義和團の中核には「十八魁」がおり彼らはその人間關係を通じて他地域から幅廣く仲間を結集した。巡撫張汝梅は趙三多を懐柔しその一派を地方軍に吸収した。この時、張は山東・直隸交界の拳術家は十九世紀半ば頃にあった「義和」という軍團から派生したものと述べた。G・スタイガー、戴玄之はこれを受けて義和團は公的な軍から生まれたという説を出したがこれは正しくない。九八年秋、飛び地の中のキリスト教徒居住地で衝突が起った。義和團はこのとき始めて「扶清滅洋」を呼號したが、清朝は軍を動員し鬪争を鎮壓した。梨園屯の長期にわたる鬪争は詳細に物語られた。何故なら反キリスト教活動としての義和團が始めて歴史に登場し、「扶清滅洋」のスローガンが現れたからである。多くの研究者が義和團はここに始まったとする。義和團の名は九九年、北西部において再び採用されるが、このことは冠縣と北西部の兩地域間に義和團が組織的に廣がったことを意味しない。兩地域の義和團の行爲や儀式は全く異なっていた。北西部の義和團の性格や内容は冠縣以外の所から出て来たものであ

第七章。山東省における近代的事業としては電信の敷設（八一）、郵便制度の整備（八七）、洋務局の新設（九八）などを擧げることが出来る。變化のテンポは緩慢で、問題はむしろ傳統的な自然災害や賠償金の負擔などによる財政破綻にあった。財政難対策として各種の新稅措置と軍事費の削減が行われた。後者の政策は地方の治安維持に困難をきたし、義和團など武術集團を軍に組み入れることになった。また九八～九九年の黄河の大氾濫により百萬人が家を失い飢饉が生じたが、財政難により救済手段は取れなかった。九八年夏、排外を掲げ大刀會と連絡しようとした童振聲の亂、九九年七月盜匪による參將岳金堂殺害事件が起っている。加えて九〇年代は山東省への帝國主義の侵略が激化した。その中心にあったのが膠州灣から西へむかったドイツ人である。九八～九九年にかけて反キリスト教事件が南東部から南西部に擴大した。三月末、蘭縣で衝突が起るとドイツはこの事件を口實に青島から軍事行動を開始した。こうした状況の中で四月、毓賢が巡撫に着任する。義和團運動の成長と擴大の中に於ける毓賢の統治は最も論争的な課題となっている。西洋と日本の研究者の中には彼の保守性と排外主義を認めたりえて、義和團の支援者として或は極端にはその創始者として毓賢を評價する。現代中國の研究者は彼の曹州での盜匪彈壓、九六年の大刀會蜂起の鎮壓を指摘し、義和團にも同様に殘酷な壓殺者であったとする。著者は、まず毓賢の官歴の大部分が山東にあったことから彼は大刀會やキリスト教徒対策を始め山東問題のエキスパートであったと見る。次に、毓賢は教會の力と、バランスを取るために農民も拳術などの防禦法を取ることを認める。法律は農民にもキリスト教徒にも等しく適用されるべきである、反キリスト教事件はドイツ人

の進出と関連しているという見解をもっていたとする。九八年六月拳術集團が濟寧、嘉祥で事件を起こしたとき毓賢はキリスト教徒側に非があるとしたが、拳術集團を郷紳の統制下におく慎重な對策をとった。濟寧地域は郷紳の力が強かったのでこの對策は成功したが、北西部で活動を開始した神拳には毓賢の政策は通用しない。

第八章。北西部は天災、人災、儒教的精神にあふれた郷紳の少なさなどの環境から秘密結社が生まれ易い地域である。この地域の秘密結社は庶民文學の中に描かれる神々への信仰、治癒、降神附體、武術鍛練などの要素を含みもっていた。北西部のキリスト教の據點は恩縣にあったアメリカ系のもので、最初の改宗者は迫害から逃れようとした秘密結社員や飢饉の救済を求めた貧農などである。その多くは八〇年代初めカトリックに變わった。義和團の據點となる平原縣には宣教師はいなかった。神拳は九六年頃黄河の西に現れた。初期の活動には反キリスト教は見られない。その共通した教義は「孝敬父母、和睦家郷」でその他強欲・怠惰の禁、弱者や若者の教導などである。また治癒活動は重要視された。その活動は開放的で拳術の鍛練は容易に目撃できた。神拳は大刀會と非常に近い關係にあるが降神附體と治癒がその際立った特徴である。降神附體に現れる神は庶民的な文學や歌劇の主人公で、例えば孫悟空、猪八戒、周倉、關公、趙雲、毛遂、孫臏など軍神が多い。神拳ではリーダーだけでなく誰もが降神附體の状態になる。神拳の降神附體の淵源は勞乃宣の言うように白蓮教にあるのではない。

をつかむ糸口は義和團の儀式を紹介した人物にある。その人物を特定することはできない。著者の考えは數人の拳術の教師であろうとしている。即ち彼らは異なつた源から様々なものを取り込んだと見てゐる。例えば降神附體、治癒、武術、叩頭燒香、護符、呪文など。これらは北西部の村落に共通に存在するものである。十九世紀後期には一般的な宗教と秘密結社の信仰とは見分けがつかなくなつており、神拳の儀式の多くは秘密結社以外の所から出て來てゐる。

九八年後期に神拳は變化を遂げた。彼らはキリスト教徒を脅かし始め組織的となり、大刀會とか義和團と呼ばれるようになった。降神附體による不死身の獲得は重要な目的となつた。同じころ荏平に朱紅燈、心誠というリーダーが現れ、神拳を治癒と不死身の獲得を中核とするものに變えた。神拳のスローガン「興清滅洋」「保清滅洋」は九九年のキリスト教徒への攻撃のときから出ている。九九年半ば頃までに神拳の名は義和團に變わつた。神拳が反キリスト教の活動に向かつたとき、彼らは冠縣の武術集團の名を借用した。冠縣の義和團の名は有名であつたからである。しかし上述したように、神拳は單に大刀會や義和團を移し變えたものではない。

神拳はどのようにして傳つていくのかを理解することは、義和團の擴大を解く鍵である。神拳が實演されるのは村内の開放的な場所に設置される「拳場」(場)である。「場」にはリーダーがいるが、そこでは總てが兄弟であり若者が拳術を學びに集まつた。「場」は次々と村に作られ、村々を移動する雇農や若者により傳達された。神拳に結集した若者は大半が十代後半であるが、經濟的背景は一樣ではなく貧農も富農もいた。特徴的なことは神拳の舞臺となつ

た北西部では南西部に比べ小作、雇農の割合が高いことである。

第九章。神拳は九九年春から平原縣で活動を始め北方へ擴大しを受けていた。平原知縣蔣蔣楷の神拳側に立つ統治も彼らを勇氣づけることになった。十月平原のフランス人神父が殺害され、鬪争は杠子李莊から恩縣の森羅殿に擴大した。このときリーダーの朱紅燈は始めて「扶清滅洋」を唱え運動に新しい方向を打ち出した。またこの戦いの中から義和團の名が現れた。しかしこのスローガンは清朝の權威に對する無制限の尊敬を表してはいない。彼らは清朝は外國の脅威を驅逐できないと見抜いていた。義和團は中國の主權を行使する願いをもっていたので清朝が彼らにどのように對應するかが問題であった。巡撫毓賢は義和團に同情的であったが、まず平原知縣と義和團に加わった武官袁世教の解任を行った。しかし著者は毓賢の政策は義和團への無條件の支持を表すものではないとしている。著者はまた八九年五月五日〜九九年一月五日間を七期にわけ、義和團の活動した北西部十七縣における各期間中の犠牲者數、襲撃された村數、キリスト教徒、非キリスト教徒の被害狀況などを分析し、十二月三日以後キリスト教徒の被害が急増することを示す。この段階にいたり毓賢の政策は義和團彈壓に轉じ、リーダー朱紅燈の逮捕となる。義和團運動は一時的に停止したが一箇月もたらずに新しいリーダーを伴って、あたかもギリシヤ神話のヒュドラーのごとくに再生する。

第十章。一九〇〇年一月一日に發せられた敕令は、騷擾事件の處理はそこに無法者が含まれているか否かのみを問えとしていた。即ち参加者が結社に所屬しているか否か、キリスト教徒か否かは問

う必要はないということであり今や義和團は結社の權利を公認されたと言える。この敕令は北京が危機的な狀況にあった中で出されたものである。毓賢は北京に歸り義和團の擁護を説いたが、このような官僚の義和團に對する寛容な評價は鵝呑みにすることはできない。何故なら先の敕令が出た後、約二週間して義和團を禁じる命令が出ているからである。清朝の政策は明らかに矛盾するものであった。義和團はこれを無視して行動し直隸に入った。その時期を總督裕祿は五月と報告するが、すでに一部の者は九九年には直隸に入っていた。即ち山東から來たリーダーが直隸の「場」に登場し影響力を發揮していた。新しい土地での参加者は歴史的に十代の若者であり、キリスト教徒への攻撃に参加し北京を目指して進んだ。四月から北京の手前の保定で衝突が起こり義和團に多數の死傷者が出た。これを機に鬪争がエスカレートし運動はもはや地方エリートの統制の及ばないものになった。直隸に入った義和團はせいぜい村、「壇」單位で行動しており全體を統率する指導體制は確立されなかった。都市部では富裕民、貧民、下層民などがそれぞれの思惑をもって参加し、義和團の嚴格な教義は薄れ運動に變質が起こった。以下、北京と天津における義和團、山西・内蒙古の鬪争、北京攻圍戰、八箇國連合軍の反擊、清朝の對應、事件の處理などが分析されている。

義和團運動は國際的には中國「瓜分」の思想を打ち破り、國內的には中國のエリートに國家の政治的事件に大衆を巻き込むことの恐ろしさを痛感させた。即ち、義和團は大衆が解放されたとき何が起こり得るか示した。毛澤東は義和團の達し得なかつた中國再生の仕事を湖南省の農民運動のなかに見ている。

結び。義和團研究者はその起源を探るにあたって最も遠い過去に

目を向け、白蓮教と共に活動する拳術家集團を發見した。しかも彼らは一八九九〜一九〇〇年の拳術家と同じ名稱を有していた。しかし兩者は本質的には全く關係がない。この點についてはマルク・ブロックの「最も遠いものによって最も近いものを説明する」(『歴史のための辯明』「起源の偶像」)という指摘は象徴的である。義和團の蜂起を研究するには山東西部の社會構造、精神、二十世紀直前の地方的、國家的、國際的政治狀況の詳細な分析によらねばならない。こうした研究の方法は義和團より十年早くアメリカ大陸で起こったインディアン・スー族の「交響踊り」(Ghost Dance)の研究においても言える。大刀會の社會は堅い組織、祕密主義、村のエリートの指導が貫かれていた。それは山東南西部の強力なエリートによって指導された社會を反映している。同様に神拳がもつた降神附體、開放的な鍛錬、技の容易な獲得、外部の人間の受け入れ、リーダーの再生などの要素は山東北西部の差別の少ない開放的な社會を反映している。十九世紀の最後の年にどうして山東西部から反キリスト教、反外國主義の運動が生まれたのか。農民社會における新しい思考、新しい組織が危機に對應して社會運動を指導し大衆が直面している特別の危機を解決するように思われる。義和團はまさにそれであった。また義和團の儀式はどのようにして中國北部の農民の中に廣がることのできたのか。その鍵は山東西部の庶民文化の中にある。庶民文化はP・ブルディューがいう「氣質」(Habitus)と同一の機能的役割を果たすものである。彼は集團的な行動の起源を論じるに當たりこの「氣質」を問題にする。義和團の場合には降神附體の儀式や英雄の活動する物語りに農民の「氣質」が乗り移り、その力を借りて農民は外國の宗教と戦った。この分析方法は太

平天國運動にも應用することができ、その起源について従来の解釋とは異なった追及ができる。ある思想がどのようにして大衆を引き付け、どのように理解されたかを追及するには庶民文化や宗教が手掛かりになる。これは今日の新しい研究分野である。

さて、本書を一讀してまず注目されるのは著者自らは述べてはいないが、問題探求の方法論として最近我が國においても關心を集めているフランスのアナール派のそれを用いていることであろう。「結び」におけるマルク・ブロックの引用などにその影響が伺えるが何よりも口述資料や民衆文化としての歌劇など民俗資料の積極的な活用、隨所に效果的に用いられた統計資料による科學的指標の提示にそれが見られる。また著者は宣教師報告、旅行記録などの西洋側資料、義和團・白蓮教關係各種檔案、地方志、政書など中國側資料を豊富に駆使し、加えて二度の現地調査を行い説得力のある敘述をおこなっている。これにより、著者は「義和團の起源」について空間的、社會的分析を行いその構造的把握に成功し、また何故十九世紀末に義和團が現れたかという歴史的把握にも迫っている。即ち、この時期の山東の内外矛盾に對抗するものとしての義和團の活動を庶民文化との關わりあいととらえている。著者は、庶民文化を義和團に媒介するものとして中國北部農民の精神世界に共通して存在する歌劇の英雄達をとらえ、その際降神附體、不死身の儀式という形をとって現れる義和團民衆の心性構造を明らかにしている。アメリカにおける最近のアナール派のアプローチの研究としては第二回日米歴史學會議(一九八七)で報告された「帝制末期の宗教オペラの文化的意義」(デビッド・ジョンソン)など數本の報告(『歴史學研究』一九八九— 笠原十九司報告)が参考になる。

著者は十九世紀末、山東省の人口が三七〇〇萬人に達しておりフランスのそれに匹敵し、その面積はイングランドとウェールズを合わせたよりも広いことを指摘する。これは現地に入っている経験にも據っているであろうが、一口に山東省といっても細かく見れば内部に地域差が歴然とあり、義和團發生の地域的特質を把握すべきという主張につながっており、ともすれば見逃され易い點の指摘である。

著者は義和團や山東農村のリーダーをあらわす階層として地主 (land owner, land lord) 郷紳 (gentry) 城居郷紳 (town's gentry) 郷居郷紳 (local gentry) 地方エリート (local elite) などの語を使用している。ここには明清社會を分析する際の、いわゆる郷紳の概念について日米間の相違が反映されていると思われる。この點「アメリカの中國研究でさかんな『地方エリート』……」という捉え方は、中國社會を基層から、すなわち地域社會から見て、その地域社會を支配し、指導する階層に着目するという視點に基づいている」(前掲笠原報告) という指摘が参考になる。

最後に、著者の研究が内外のこれまでの義和團研究を踏まえていることは巻末の参考文献目録に伺えるが、日本の研究が十分に反映されているかについてやや疑問を感じた。例えば堀川哲男氏の「義和團運動の發展過程」(一九七八)、小林一美氏の「義和團の民衆思想」(一九七八) などには著者が問題にしようとした義和團の起源、義和團に現れた神々が觸れられている。勿論、これらの論文は目録にリストアップされているのだが、内容的にどう評價するの可言及されてしかるべきだと思われる。

なお jian sheng 鑑生(四二五頁)は監生の、堀川哲南(四二六

頁)は堀川哲男の誤植である。

Berkeley and Los Angeles: University of California Press

1987, 26cm, 470pp

五四運動の研究 第四回

⑩新儒家哲學について—熊十力の哲學

⑪後期康有爲論—亡命・辛亥・復辟・五四

島田 虔次
竹内 弘行

坂元 ひろ子

本書所収の三論文はいずれも、従来の研究ではほとんど扱われなかった對象を眞正面に据えて論じている。以下にそのうちの二篇を紹介してゆく前に、後學をよい意味で刺激する、こうした先學による研究開拓に對して、敬意を表しておきたい。同時に、三論文のうち小野信爾氏の歴史の掘り起こしを伴う力作「救國十人團運動の研究」については、評者の力には餘り、しかるべき評者による專評に譲るはかなく、すでに別の評者が豫定されていることをお断りしておきたい。

「新儒家哲學について—熊十力の哲學」

のっけから評者の私事で恐縮だが、この島田氏の論と評者にはある因縁があった。日本ではマイナー中のマイナーというべき熊十力を評者もまた研究對象とし、本論文刊行の翌月、拙稿も公になった(『熊十力』『新唯識論』哲學の形成)『東洋文化研究所紀要』一〇四冊)。その「追記」で因縁のあらましを述べたので、ここでは繰